鈍感な愛情の行方

天空 羽音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鈍感な愛情の行方

【Ｎコード】
Ｎ４７２３Ｅ

【作者名】
天空　羽音

【あらすじ】
今日は土曜日で休日。昨日は給料日だったせいもあり同僚５人で飲み会だーと梯子酒してたけど気がついてみれば２人になってた。

１夜遊びの朝は（６／１６）（６／２２改）（前書き）

小説初挑戦のど素人です。何を血迷ったか浮かんだままに文章打ち込み。キャラ勝手に行動するので展開わかりませんが…頑張ります。

２００８．６．１６

1夜遊びの朝は（6／16）（6／22改）

外に出てみたら太陽が眩しくて景色が黄色に染まって見え思わず瞬きしてみたけどやっぱり黄色っぽい…

「はぁ～ため息も何だか黄色なのは気のせい？」

「あんた、それ気のせいじゃなくてお酒飲み過ぎでしょ」

笑いを含んだ声で後ろから話しかけてきたのは美里。

彼女が会計している間に先に表に出てていた私

「やっぱり？じゃ美里も景色黄色く見えてる？」

「うんうん。見えたよ」

「だよね」

「もう朝6時過ぎだよ。暗い店から出たから色彩感覚寝ボケてるんでしょ」

今日は土曜日で休日。

昨日は給料日だったせいもあり同僚5人で飲み会だーと梯子酒してたけど気がついてみれば2人になってた。

まぁいつもの事だし美里と飲むのはお気楽で好き

「さて、美里帰ろうか？」

「うーん…スタバでココア飲みたいな？いい？」

「いいけど？」

欠伸をかみ殺してとりあえず並んで歩く。

今時めずらしい黒髪に肩先までのストレートヘア
身長１６５ｃｍの美里はスタイルも良くてかっこいい

それに比べてちょっと栗色のクセのある髪を1本の三つ編みにしている私

短くする勇気もなくて定期的に揃えるだけと切ってもらってるから背中の半ばまで伸びた。

身長１５６ｃｍ。体系もいたって普通で時々学生と間違えられてしまう。

あぁもう少し身長欲しかったのになぁ～

「遅いよ。はやく～」

考えながら歩いてたから歩調がゆっくりになってたみたいで催促される。

美里は私より歩幅もあるから少し小走りで追いつかないと

2スタバで（6／16）（6／22改）

スタバの窓際の席に向かい合って座りぼんやり通りを眺めてたら眠くなりそう

「ぼーっとしてると冷めるよ？」

「美里もぼーっとしてる」と笑ってみたら

「やっぱり？お化粧直しにいこう！」

と手を引かれあっという間に化粧室に引き入れられ

「ほら。さっさと直して」

「え～もう帰って寝るだけだからいいよ。」

「いいから！」

テキパキと自分を終わらせた美里は私の顔に手を掛け勝手に手直し完了。

「これでよし」

軽く香水も付けられて

「さぁ席に戻るわよ」って言ってるけど

「もう冷めてるよ？」

半分残ってたカフェモカは勿体無いけど飲む気はしない…

美里は席に座って腕時計をチラッと見てから

「いいからそんなにしかめっ面しないの。ニッコリして？」
とニッコリ微笑まれ真似して口角あげてみた途端にテーブル横に人の気配

「お待たせ！」
の声に引きつった笑みのまま振り仰いで見れば長身の男性が2人並んで立っていた。

バッチリと目が合った茶髪の人に笑いかけられたけど知らない人。

首を傾げて
「お間」違いですよと続く言葉は美里の声に遮られて

「待ってたわよ」
「待たせてごめんね」
と会話が成されてく。

「あの…誰？美里の友達？」と聞いてみれば

「「「えっ！！」」」
とびっくりされ意味わからず1人挙動不審に…

「まぁ…座って座って」

美里の声に1人が私の横に座った。チラ見で観察。
縦縞の入ったグレーのスーツにちょい短めの黒髪が似合ってるけどちょっと怖そうな感じの人だった。

3友達？（6／16）（6／22改）

「とりあえず自己紹介しようか？」
と言ったのは私の斜め前に座った茶髪に黒のスーツで優しそうな感じで愛嬌がある人。
「僕は長谷（ハセ）　章太郎（ショウタロウ）です。ショウって呼んでよ。」とニッコリ笑顔付き。
「俺…」
低音の声に隣りを見ればこっちを見ながら（に…睨んでる？）としか見えない目に少し仰け反った。
「プッ」吹き出した笑いにつられて向けばショウさんも美里も笑いをこらえてる感じ？
「お前ら笑うな！」
何だか判らないけど3人には通じるらしい…
隣りから
「あのさ」と声がして思わず
「ハイ！！」と大きな声で返事して見れば益々怖い顔になったみたい
（うっ…このタイプ苦手なんだよね）
「捕って喰わないからビクつくな！」
「…ハイ」
「はぁ～。俺の名前は安西（アンザイ）　力（リキ）。そのまんまリキで宜しくな。」と

言われたので頷いた。

「さて、じゃ今度はこっちね。私は佐々　美里（ササ　ミサト）。子供の頃はササミちゃんて呼ばれてたけど絶対呼ばないで！」

「ササミちゃん。かわいいのに～クックックッ」

ショウさんは笑い上戸？

この2人はまるで正反対だなぁなんてぼんやりしてたから呼ばれてるのもわからなかった。

「…オイ！」

リキさんの声に顔を向けば3人の視線に戸惑う。

「もうほらっ！惚けてないで名前よ！」

「あ…神尾（カミオ）　凛（リン）です」

とりあえず紹介も終えてホッとしたけど美里の友達でもないなら何者？

4謎解く鍵（6／17掲載）

「あのさ凛。この人達は」
「美里ちゃんストップ！」
美里の話しをショウさんが止める。

「言ったらつまんないでしょ？自分で思い出した方がよくない？」

「だって…」
と美里がこっちを見ればショウさんも
「凛ちゃんさ。謎解く鍵はあげるから自分で謎解いてね。」とニッコリ。

「あの…」

思い出さなくても特に問題ないと言いそうになったけど言ったら失礼になるし美里の逆鱗に触れたくないので言うのを止めてこくっと頷いた。

「美里ちゃんは教えない事！いいね？」

「しょうがないな了解！」
あとで美里にこっそり聞き出そうと思ってたのに…
彼女は口が堅いから約束は守るし無理ね

心の中でこっそりため息ついて諦め、そういえばと隣りをチラッと見れば我関せずで正面見据えて聞いてるだけみたい…
この人はもっと無理ね。

視線をショウさんに戻してみると真剣な目とぶつかり顔が引きつりそうなのを堪える。

「鍵をあげる前に約束して欲しい」
「な…なにを…？」

「1ヵ月はなるべく傍においといてほしいんだ」
「えっ！！」
持ち歩くの？暗号解読文？御守りとか？何でもいいけど軽い物だよね？ホントに思い出さなくても問題ないんだから思い出して欲しいなら素直に教えてくれたらいいのに

案外意地悪？

なんて考えながら真剣なショウさんに頷いて返せばニッコリ笑顔で

「鍵は隣りにいるリキだから頑張って。」と爆弾投下され固まった。

うそっ！
めちゃくちゃ重いし恐いんだけど（泣）

5突然の変化（6／18掲載）

急に振り向いたリキさんがわずかに微笑みながら

「りん…」

私を見つめて囁くように呼ぶからドキッと心臓が跳ねた。

答えたいけど胸が苦しくて声が出ない。

「凛…」

私の頬に指先で触れてリキさんの顔が近づいて髪が鼻先をくすぐる。

（ちょっと待った〜！！）

なんで声出ないのよ。

それにリキさんさっきまでとキャラ変わってるしヤダヤダ近いってば退いてよぉ〜（泣）

美里達は見てるだけで助けてくれそうもないし〜

気持ちだけもがいているうちに唇の近くをペロンと舐められた！

「いっ！！うわっ！！」

あれ？

目の前に真っ白な毛玉？

リキさんではなく美里の飼い猫のミルクのドアップ。
胸が苦しいのはミルクが乗っかってるし頬には肉球が…鼻先をくすぐってたのはヒゲかぁ
「ハァ～疲れた…」

「もう凛たらやっと起きた？」と美里が部屋に入ってきてミルクを抱き上げた。
「う…ん。起きたよ」
胸の苦しさ無くなってホッとした
「さっきから声かけてるのにちっとも起きないからミルクに頼んだのよ」
囁く声は美里だったのね
何であんな有り得ない夢見るかな…
「まだ眠そうだけど起きてね」と笑顔で出て行った

そういえば今何時？
壁の時計を見ればもうすぐ3時になろうとしてる
鍵…はぁ～

あの爆弾投下された後
茫然自失の私を放置し美里がテキパキとみんなの携帯番号とアドレスを交換してショウさんの車でマンションまで送ってもらった。

６ふたり暮らし（６／２０掲載）

このマンションは一時期ストーカーに狙われた美里を心配して美里父が購入してくれた物件でセキュリティーも完璧。

家具や家電は美里母が選んだカントリーでコーディネートされたとっても素敵な部屋。

もともと私達は会社の女子寮で同室だった。

仲も良かったし多少の後遺症があった美里に不安だから一緒に住んでと泣きつかれた。

それまで美里が社長令嬢だなんて知らかったからビックリもした。

家賃はいらないと言われたけど光熱費だけはと渋々了承させた。

それでもこの広い４ＬＤＫの一室で３万円なんて有り得ないよね。

おまけに手ぶらでいいと言われ女子寮から持ってきたのは洋服と小物。

もともと家具とかは付いてたから持ち出すような大きな物もなかったし簡単な引っ越しだった。

今年でお互い２４才…

２人とも彼氏いないし

今の生活は楽しい

けど彼氏も欲しいかな？
美里はどうなんだろう？
まだ引きずってる？
そんな事聞けないけど…
リビングに行くと
「あっ、やっときた。カフェオレ飲むでしょ？」
と私の分も作り始めた。
「うん。美里のカフェオレ大好き。」
「ありがとう。ほめられても彼らの事は内緒」
「えぇ～なんだ残念。ほめて損した～」
「フフッあんた全然残念そうな顔してないわよ」
「だって思い出さなくても困らないし～初めましてから始めてもいいと思うんだけど…ね？」
「…そうだね」
そう言った美里の顔がちょっと淋しそうに見えた気がした。

7戸惑う思い（6／21）（前書き）

初めての妄想文章を読んで頂き感謝します。
下書きもあらすじもなく思い浮かぶままのストーリーなので読み返したら変だなと感じてしまい1～3までを書き足したり直したりしました。6／22以前に読んでた方はご面倒でももう1度読んでもらえると多少の人物像がわかるかも？特に1話は後半部分に文章増やしました。

7戸惑う思い（6／21）

でも、いつ会ったの？会社関係？取引先の営業さんとか？うーん…
2人とも性格も見た目も対象的だけどイケメンに属するタイプ
だから会社関係なら噂好きな真帆達の話題になるから名前ぐらい聞いた事だってあるはず…

「あとは合コン？」
私の呟いた言葉に

「何？あんた合コンしたいの？」と驚いて、見ていたファッション雑誌をテーブルに置く美里。

「まっさか～」

「そうよね。だって合コン嫌いだもんね？」

「うん。合コン苦手」

「会社の合コンも凛の隠れファンが誘えってウルサいらしいわよ」
とクスクス笑う。

「それ違うよ？高嶺の花の美里に出て欲しいから私を誘うんだよ？」
美里は私がどうしても断れないと仕方ないわねとついてきてくれるから

「まぁいいわ。それで合コンがどうしたの？」

「会社でもないから合コンで会ったのかなぁ～と思って…あの2人…」

「…そう…気になる？」

「う～ん。気になるってゆうか向こうが覚えてるのに覚えてないのも悪いかなぁって思っただけ」

そうそれだけ…

「だったら連絡したら？案外思い出すかもよ？携帯に番号とアドレス登録してあげたでしょ？」

「ムリムリ～だって何話していいかわかんないし…それに…」

「それに？」

「…恐いの。ショウさんは平気だけど、リキさんが傍に来ると恐いの」

心配そうな美里を見ながら正直な気持ちを吐き出した。

「確かに無口で恐そうに見えるかもね。でも最初だけじゃない？」

見た目の恐さだけじゃないんだけど気持を上手く説明できなかった。

8デリバリー（6／23）

カフェオレを飲み気持ちを落ちつかせようとしたけど失敗した。

「ほらまた眉間にシワ！シャワーでスッキリとしてきたら？」

「うん。そうする。髪もグチャグチャだし（笑）」と指先に髪を巻きつけた

「出たら髪乾かしてあげる。今日は凛をお姫様の用に甘やかしてあげるから覚悟しなさい」

「ラッキー！でもあとで意地悪な魔法使いに変身したりしないでね」

クスクス笑う美里を背にバスルームに向かった。

洗面所は広いので下着やルームウェアなどはここに収納されている。部屋に取りに行かなくてもいいから便利よね。

三つ編みを解くと昔見た絵本の人魚姫のような長くてクシュクシュの髪。

もうそろそろ切ろうかな

（…りんの髪は綺麗だから切っちゃダメだよ）

昔誰かに言われた？

美里に言われたのかもと思考を打ち消した。

シャワーも済ませ髪も乾かしてもらってスッキリしてソファーで寛

ぎながら思いだした。

「そういえばさ？１ヵ月傍にって言ってたけど…どういうことかな？」

「あぁあれね。実は…」

と美里が話し出した時にピンポーンとチャイムが

直接玄関まで来るのは美里母だけだから何か用事があってきたのかも？

「もうきたのね。」

「えっ？美里、おば様と約束あったの？」

「ううん。ほらいろいろあって凛も疲れてるからデリバリー頼んだの」とニッコリ微笑んで玄関に行ってしまった。

美里母にわざわざデリバリーなんて何て事～と思いながら疲れてたのは本当だから美里の気持ちが嬉しかった。

はぁ～ため息つきながら両手を挙げ少しソファーに仰け反るように伸びをしたけど（えっ？）逆さまに見えたその人の顔に驚いてそのまま固まった。

9訪問者（6／24）

えっ？なんで？

「えぇぇぇ～～～～～」

体制を戻そうとしたけど慌てふためいてソファーから転がり落ちた。

「うわっ…っててて…」

ラグの上だから痛くないけど恥ずかしい…

「あーあ何やってんのよ」

美里の声が聞こえたと同時に背中と膝の下を抱え上げられソファーにフワリと戻された。

あれっお姫様抱っこ？

気がついた瞬間、ボッと顔が真っ赤に染まり俯いた。

「大丈夫か？」

心配そうな声に目線を合わせれば目の前で片膝ついてるリキさんだった。

「はい…ありがとう…」

リキさんの目は漆黒でその瞳の中に自分が映り出しているのを不思議な気持ちで見ていた。

「リキ～荷物取りにこい」

玄関の方から叫んでいるショウさんの声に呪縛が解けたようにホッとした

「あぁ今行く！」

私の頭にポンと触れて立ち上がって離れて行く。

「凛も手伝って～」と美里の声に玄関へ急いだ。

旅行カバン。キャリーバックなんかが合計６つ。その先にショウさんが笑顔で立っていた。

「凛ちゃん。朝ぶり～」

「あっ・・今朝は送って頂いてどうも…」

「あーいいよ。ついでだったから大丈夫。この場所も覚えられたしね。」

「さぁ運んじゃいましょ」

あの～美里さん、これは誰の荷物なのかな？

怖過ぎて聞けない（泣）

「部屋はここととそこよ。お好きな方をどうぞ。」

「リキ～ジャンケンで決めようよ」

「お前はまた…」

「ん～と勝った方が右、負けた方が左。ＯＫ？」

「ああ」

いくら鈍感な私でもここまでくれば状況がわかる

とりあえず今はリキさんが負けますようにと心から願った。

１０　隣り決定（６／２５）

神様のバカ～
リキさんが負けるように願ってたのに～

私と美里は廊下を挟んだ向かい合わせの奥の部屋
ショウさんは美里の隣り
リキさんは私の隣り決定

「さて、部屋も決まった事だし夕食にしましょ」
と美里が私の背中をポンポンとたたいた。

彼達か〝買ってきてくれのを２人でお皿に盛ったり温め直したり
ピザ、ラザニア、ドリア、お寿司、筑前煮、回鍋肉、酢豚、棒々鶏…
なんだか凄いんだけど？

「いやさ～何がいいかわかんないからデパ地下で手当たり次第に…ね」
とショウさんニッコリ。

「とりあえずビールで乾杯しましょ？」と美里の合図で食事が始まった。

席は朝の再現のように隣りにリキさん…緊張する

正面の美里と目が合って睨むように見ると困ったように微笑み話だした。

「凛には事後報告になって申し訳ないんだけど、この人達ね…先日帰国したばかりで住む所まだ決まってなくてホテル住まいって言うから1ヶ月空き部屋にって勧めてしまったの」

ああだから直接玄関まで来れたし1ヶ月傍に置いてだったのか…とショウさんを見れば

「凛ちゃん、ごめん。だけど1ヶ月宜しく」と頭を下げられ慌てて

「いえ、あの、こちらこそ宜しくお願いします」と返事をしてしまった。

隣りをチラッと見れば

バッチリ目があって仰け反りそうなのを耐えた。

「俺も宜しくな」と言われてコクっと頷いた。

緊張をほぐす為に、ひたすら飲んで食べて、気がついた時にはあれほどあった料理は4人の胃袋に収まっていた。

１１眠れない夜（６／２６）

ショウさんの話し面白いなぁ～
「クスクスッ」

あれっ？
自分の笑いで目覚めてそっと目を開けてみれば真っ暗

いつの間にか寝てたみたい

ここは？
リビングのラグの上？
隣に美里？…じゃない
誰？ジッと目を凝らすとデッカい人？

あっ？これって美里の部屋にあったでっかいキリンのぬいぐるみじゃない

なんでこんな所に？と思いながらクルリと寝返りをうって
「えっ？」今度こそ人がいて焦った。

おまけに至近距離に顔があって危なくぶつかりそうだったじゃない。

「ん？起きたのか？」

この声はリキさん？更に焦って固まり動けない（泣）

「あっ…起こしちゃって…ごめん…なさい…」

「…」

「あ…あのなんでここで？」

「あぁ眠そうだったから部屋連れていったんだ。だけどキリン抱えて戻ってきた」

まったく覚えてない…

「な何でリキさんまで？」

「お前覚えてないの？」

「えっと～キレイサッパリ。あははっ…」

はぁ～とため息つかれても知らないし…。

「まぁいい！まだ時間も早いし寝ろ」

と抱き寄せられた。

嘘っ！

胸に引き寄せられ心臓の音がトクトクと聞こえる

悠長になんて寝れるわけないじゃない（泣）

顔は真っ赤だし心臓は暴れまくってて今にも口から飛び出してきそう

「あ…あの」

「なんだ？寝れないのか？」

「これじゃ眠れない」

「わかった」

すくっと起き上がったリキさんにホッしたけど次の瞬間また固まった。

だってお姫様抱っこでスタスタ歩き出したから…

フワリとベッドに寝かされまた抱きしめられた。

って場所がリキさんの部屋に移動しただけじゃないの～なんで～（泣）

１２　４人暮らしに（６／２８）

枕が硬い…んだけど？…

パチッと目を開ければ漆黒の瞳とぶつかった。

…あ…腕枕…？

「…あっ…おはよう…ございます…」

「おはよ…クッ」

突然笑いかけたリキさん

「何が…おかしいの？」

と聞いてみたら

「お前ッ…（……）みたいに真っ赤…ッ」

聞いた途端、カバッとベットから飛び出して部屋から走りでた。

ドンッ！！

「うっ！」

「いってぇ～」

廊下に居たショウさんにぶつかったけどショウさんも寝起きでぼんやりしてたみたいで突進した私を支えきれずに私を抱えたまま尻餅ついた。

後ろからリキさんが
「凛…ショウを襲うな」
と脇の下から手を入れて立たせてくれた。

「襲ったんじゃ…」

振り返って言いかけたけど朝からからかわれてばかりで恥ずかしくて悔しくて涙が出そうになるから俯いてしまった。

「みんな早いわね？」
後ろからの美里の声にホッとしたと同時に涙がポロッとこぼれ落ち
「みさと～」と抱きついた

「凛、どうしたの？」
と抱きしめてくれて…
足元にミルクもすり寄ってきて
「ミャー」と鳴いた

「リキ。からかうのもいい加減にしないと嫌われちゃうよ？」
「…っ！」

後ろでそんな会話があった事は聞こえなかった。

しばらくして落ち着いて朝食を食べながら話してるのは2人だけで…

「まったくリキは例えを間違えてるよ」

「そうよ。普通りんごとかタコとかじゃない？」

「それを
「猿の尻みたいに真っ赤だ」なんて…クッお前らしい」
「そこ笑うとこ?…フフッ」
2人共、楽しそうね…
なんか1人で怒ってたのもバカらしくなって
「あははっ…」と笑った。
ポンと頭に手を乗せられ隣りを見れば困ったような顔のリキさんが
「ごめん…な」
と謝ってきたから微笑み返した。
出会ってまだ24時間
残り…29日
4人暮らしが始まった。

13　ルール（6／30）

うわぁ～きゃ～思い返してみたら一緒に寝てた事の方が恥ずかしい事に気がつき真っ赤になりながら腕枕って硬いんだなぁなんて1人考えてたら

「ちょっと凛、聞いてる？」

「へっ？」

美里がため息つきながら

「4人で暮らすからにはいろいろルールを決めないと困るでしょ？」

「あ…うん。」

食事が終わってこれからの事を決めてる所だった

「でね。トイレは2ヶ所あるからどちらか男性用に。あとはバスルーム1、シャワー室1だから…」

「じゃ男はシャワー室でいいよ。向こうでもそうだったしさ。な、リキ？」

「ああ」

「じゃあとは食事は凛と交代で作ってるから2人分増やすけど、凛いい？」

「う…ん。あの、お口に合うかわからないけど？」

「えっ？作ってくれるの？」　とショウさんが身を乗り出してきた。

「あの…和食と中華が中心になるけどいいのかな？」

「いいなんてもんじゃないよ～。もうステーキとかバタークサいのばっか食べてたから醤油や味噌が恋しかったよ。うっ」

目が潤んで、昔飼ってたハムスターの目に似てる。なんかかわいいかもなんて見て微笑んでたら

「遅くなる時は連絡する。そっちも用事ある時は無理しなくていいから」とリキさん。

「じゃあとは何か気がついた時にでも…あっ？色男さん達？」

「なに美里ちゃん？」

「…？」

「くれぐれも彼女達を引っ張り込まないようにね」

その言葉にニッコリ笑ったのはショウさんで

隣りのリキさんは腕組みしたまま憮然としてたけど室温が下がった気がしたのは私だけかな？

ひっ…冷気を感じて寒い！

１４　凛の心情（７／９）

あれからそれぞれ部屋に戻ったから私も部屋のベットの上でゴロゴロしながらこれからの事を考えた

私は両親と兄（１０才上）の４人家族

中学生になった年に兄は大学卒業し社会人になったと同時に海外勤務になりほぼ帰国してこない。

大学の４年間もバイトと友人宅を渡り歩いてるような人だったし父も単身赴任であちこち飛び回ってるから年に数回しか会わない状態（現在は母も赴任先へ）。

母子家庭のように過ごしてきたから男の生態は謎。

この機会に観察しようかなんて考えて…冗談と自分に突っ込みいれてたら

…コンコン

ノックの音にハイと返事をすれば美里がミルクを抱えて入ってきた。

「美里どうしたの？」

「ドライブがてら買い物行かない？」

「…行くけど…約束…ね」

ちょっと困った顔して
「わかってるわ。じゃ２０分後にリビングで」と美里が出ていった。
ドライブって美里の運転…不安だ～
彼女はスピード狂だったりする。
初めて行ったドライブでは途中で悲鳴をあげる私が楽しんでると勘違いし益々スピードをあげ横浜大黒パーキングについた時に青ざめて震える私を見て
「えっ？真面目に怖がってたの？」とやっと気がついてくれた。
私が乗る時は二度とスピード出さないと約束させたけど高速はやっぱり怖い
絶叫系、高い所がダメな私には遊園地も苦手…
あっ着替え～時計を見たらもう5分経過してる
あたふたしながらも洋服は七分袖の白いカットソー（袖と裾がＡラインに広がってお尻が隠れる長さ）とデニムのハーフパンツをチョイス。
髪は軽くブラッシングして耳の後ろにゆるく2つに結わえた。
（カニ食べいこ～♪と歌いたくなるような髪型かもと苦笑した）
鏡を覗き込んで最後にローズ系のグロスと香水を簡単につけて小さめなカゴバックを持って部屋を飛び出した。

１５　望まない行動（７／１０）

リビングで最初に目に入ったのは美里ではなくソファーでにこやかに寛ぐショウさん

その後ろでリキさんが腕を組んで壁に寄りかかって

（に…睨んでる？）

…うっ！怖いんだけど…

本当に対象的…

「さぁ行きましょー」

肩を叩かれホッとため息ついて美里に振り返ってみればポニーテールにレモンイエローの（胸下でリボンでしめる）アンサンブルにシルク混のデニムジーンズ。

美里は動き易いパンツスタイルが多いけどモデル並の体系だから何を着ても似合うんだよね。

ショウさん達に

「あの…行ってきます」

と声かけたら

「「「えっ？」」」

またこのパターン？

「へっ？」

1人わからず問い返し

「凛たら。みんなで行くのよ」と微笑の美里

「この辺の地理も覚えないとね。」

と笑顔のショウさん

「…」

…相変わらずなリキさん

言われて見れば2人共、朝と違う服装。

ショウさんはモカ茶のインナーに白いシャツに白いジーンズ。

リキさんは白いカットソーにボーダーの上着を肩にかけブラックジーンズ

白騎士と黒騎士って感じ？

それより…3人共モデルのようで眩しい…

うわぁ～このメンバーで行くの嫌かも～

「あの…る」

「「ダメ～」」

と美里とショウさんに挟まれ結局、地下駐車場まで連行され留守番したいと言えなかった…

車に乗る前に最後の足掻きでリキさんと目が合い

「だったら俺と留守…」
最後まで話を聞かずに速攻で車に乗り込んだ。

１６　快適なドライブ（７／１１）

空は快晴。窓から見える流れるような景色も綺麗

私は運転席の後ろでニコニコとすごくご機嫌だったんだけどしばらくしてからあることに気がつき居心地が悪くなった

私の横に座ってる人

腕組み、足組みシートにふんぞり返って座っててちょい機嫌が悪いのが伝わってくる。

「あの…美里？」

「…なによ」

「いや…あの…そのね…お天気いいね～ははっ」

「…そうね」…会話終了

ご機嫌斜めは美里

運転をショウさんに取られたものだから拗ねちゃって…まったく

「美里ちゃんソフトクリーム買ったげるからそれで機嫌なおして。それに運転は男に任せてよ。女の子はさみんなお姫さまなんだから」

うわっ…甘～～～い

ショウさんてば時代間違えて生まれてこなければ完璧な王子さまだ

ね。

ん？前世が王子さまだったのかも？…妙に納得

「わかったわ。Mのソフトクリームね」

「了解。高速降りたらドライブスルーしよ」

と言ったショウさんの横でリキさんがカーナビをピッピッと設定した

約束通りソフトクリームを食べ機嫌が良くなった美里…っていっても

ももともと怒りが持続するタイプじゃないからホントに拗ねてたって感じ

今から行くのは八景島

遊園地もあるけど水族館があってイルカショーが見れる

「やっぱり日曜だから混んでるね。駐車場ちょっと遠くになるけどしょうがないか」とため息混じりにショウさんが呟いた

車から降り思いっ切り両腕上げて背筋を伸ばした途端に

「あははっははっやっやめて～み…みさとぉ～」

体ひねって逃れて見ればちょっと意地悪そうな顔の美里が

「凛にはくすぐりの刑！私の運転じゃないからって浮かれてた罰よ」

「ごめん。でもくすぐりは勘弁してよ～笑い死にするって」

「凛ちゃんにはくすぐりの刑と…インプット完了」…ショウさん…

うっ…また1人遊ばれそうな人が増えた～と思ってたら

「行くぞ」
とぐいっと左手首を掴まれリキさんの胸にぶつかった
慌てて見上げて謝ろうとしたら目が合った瞬間にそらされて…ちょっとだけほんのちょっとだけ胸がチクッと痛くなった気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4723e/

鈍感な愛情の行方

2010年10月15日17時40分発行